



TITLE:

漢藥「骨碎補」の生薬学的研究(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

野呂, 征男

CITATION:

野呂, 征男. 漢藥「骨碎補」の生薬学的研究. 京都大学, 1965, 薬学博士

ISSUE DATE:

1965-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211538>

RIGHT:

【196】

氏 名	野 呂 征 男 の ろ ゆき お
学 位 の 種 類	薬 学 博 士
学 位 記 番 号	論 薬 博 第 22 号
学位授与の日付	昭 和 40 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	漢薬「骨碎補」の生薬学的研究

論文調査委員 (主 査) 教授 木村康一 教授 富田真雄 教授 井上博之

論 文 内 容 の 要 旨

骨碎補は開宝本草(937)に薬性論、雷公炮灸論(5世紀)、本草拾遺(739)などの記事を引用して収載され現在に至っている。これらの記事によると、古名は猴薑といい、骨碎を補する効があり、歯痛、止血、耳鳴などの治療にも用いられた。現今も中国では筋骨痛、打撲傷、歯痛、歯槽膿漏、耳鳴などの治療に用いられている。

本草書ならびに市場にみられる骨碎補の基原植物について、文献にはウラボシ科、シノブ科などの植物が挙げられているが、いずれも推定の域を出ず、いまだに定説は得られていない。

著者は本研究において、本草書に記された正条の骨碎補の本質を明確にし、市場品生薬ならびに類緑植物の形質、構造、それらの異同、鑑別要点等を明らかにし、本草書の骨碎補と市場品の骨碎補との関連を明確にすると共に、それらの原植物に関する諸説の混乱を解決した。

(1) 本草拾遺、図経本草、証類本草に記載の骨碎補の(舒州〃、戒州〃)は *Drynaria fortunei* J. SM. ハカマウラボシを基原とする。本草綱目も基本的にこれを継承し、植物名実図考卷十六の骨碎補も同一物である。本植物を正条の骨碎補の基原植物と称すべきである。

(2) 本草衍義の骨碎補、秦州骨碎補、和漢三才図会、植物名実図考卷十七の骨碎補は、いずれも北方系 *Drynaria* を基原とする。

(3) 海州骨碎補については、わが国の本草書、中国植物志などに記された説が妥当と認める。すなわち *Davallia mariesii* MOORE シノブを基原とする。現市場品にはシノブを基原とする生薬は見出されなかった。

(4) わが国の本草家が、骨碎補の基原植物として推測したアオネカズラ、イワヒトデ、オシヤグジデンダは、それらの形質が本草書に記された骨碎補のいずれにも合致しない。明らかに彼等の誤解である。

(5) “清”代の文献に碎補、過山龍の名が骨碎補の一種として挙げられている。これらは雲南地方産の *Araiostegia* または *Leucostegia* 両属(シノブ科)の植物と推定されるが、現市場品中にこれらを基原

とする生薬は見出されなかった。

(6) タカラビならびにウチワドコロを骨碎補の基原植物とする説があるが、いずれも誤りである。

(7) 市場品骨碎補は4種あり、おのおのの原植物を決定した。そのうち2種は *Drynaria* を基原とし、他は正条の骨碎補とは全く異なるものである。

a) 毛姜、申姜または骨碎補の名称で中国市場で扱われている生薬はハカマウラボシを基原とし、正条の骨碎補に該当する。

b) 猴児姜、北方産申姜は *Drynaria sinica* DIELS を基原とする。秦州骨碎補、青海骨碎補に相当する。

c) 現市場に骨碎補または大骨碎補と称し *Agraomorpha coronans* COPEL, カザリシダを基原とする生薬を見出した。文献に申姜、毛姜の基原の一つとして本植物を挙げている。

d) 骨碎補または小骨碎補と称し *Davallia formosana* HAYATA タカサゴシノブを基原とする生薬を現市場より新らしく発見した。本植物は現在までの骨碎補に関する文献には全く記載されたことがない。

(8) 骨碎補として日本に輸入される生薬は殆んどがカザリシダ、タカサゴシノブを基原とするもの(7c, 7d)で、いずれも正条の骨碎補ではない。ハカマウラボシを用いる正条の骨碎補は中国市場で毛姜、申姜または骨碎補の名で扱われているが、日本へはまれに輸入されるのみである。

(9) 骨碎補の基原植物および類縁植物について、比較解剖学的検討を行なった。その結果、根茎の内部構造の細部は互に酷似し、その比較によって近植物を区別同定することは困難であるが、鱗片の形質は種によって特徴的であることが明らかとなった。したがって根茎の構造（主に中心柱の形式）によって科属を大別し、鱗片の形質の特徴によって種の鑑別、同定を行なうことが適当である。

論文審査の結果の要旨

漢薬骨碎補は開宝本草(937)に収載され、今日も引続き中国では筋骨痛、打撲傷、歯痛、歯槽膿漏、耳鳴などの治療に用いられ、わが国にも本草と共に紹介され、今日少量の輸入利用もあるが、その基原植物については文献的にも種々の説が見られ、中国市場品のみならず、わが国に輸入される生薬についても問題がある。

野呂は本研究により、本草書の正条の骨碎補の原植物を究明し、また現今の市場品および類縁植物の形質、構造を研究し、それ等の異同、鑑別要点等を明かにし、本草書の骨碎補と市場品の骨碎補との関連を明確にすると共に、その原植物に関する諸説の混乱を解決した。

すなわち古来の本草書の骨碎補は今日中国市場で別名毛姜、申姜等の名称で扱われているウラボシ科のハカマウラボシを当てるのが正しい。その後の北方系のものも同属の植物の根茎と査定する。海州骨碎補はシノブと考えられ、その他、異属のものも考えられるが、今日中国生薬市場品に発見できない。

わが国の本草家が当てたものその他、旧説は誤である。現市場に大骨碎補と称するものはカザリシダ、小骨碎補と称するものはタカサゴシノブであり、わが国に輸入される骨碎補はこれ等である。

本論文は薬学博士の学位論文として価値あるものと認定する。